

令和6年度
第42回
福祉体験
作文コンクール
優秀作品集



©aichikenshakyo

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

はじめに

本会では、昭和五十八年から「福祉体験作文コンクール」を実施しています。本年度は、小・中・高等学校あわせて二百一校、三百四十一名の児童・生徒の皆様からご応募をいただきました。日常生活の中での様々な経験や家族などとの身近な体験、ボランティアや福祉実践教室などを通して気付いたこと、感じたことが素直な気持ちで作文に表されておりました。この作文コンクールにご応募いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

近年、様々な場面において児童・生徒などの若い世代が多様なボランティア体験や福祉活動に取り組む機会が増え、福祉やボランティアへの理解・関心が広まってきております。本会といたしましても、今後、地域福祉活動への支援や福祉教育活動への充実に向けて、より一層取り組んで参りたいと考えております。

このたび、選考委員会において厳正なる審査をし、二十八編の入選作品が決定されました。ここに、本年度の優秀作品集を作成しましたので、今後の福祉教育活動の推進にお役立ていただきたいと思います。

最後に、審査にご協力くださいました各委員の方々、作品の応募にご協力くださいました各小中高高等学校、各市町村社会福祉協議会、さらにはボランティア関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

令和七年二月

はじめに	1
目次	2

小学校低学年の部

みんなのえがお それがふくし	二年	竹内桃菜	4
だれかのえがおのために	二年	大家明奈	5
はく手	三年	服部光桜	6
一日アイマスク体けん	三年	杉浦芽唯	7
理学りようほうしという仕事	三年	立岩映人	8
おじいちゃんのおえになれたぼく	三年	浅野弘武	9

小学校高学年の部

誰かのために	四年	横井健	10
ヘアドネーション	四年	新井莉那	11
点字から広がったなりたい自分	五年	井上尚希	12
認知症サポーター養成講座を受けて	五年	湯川瑛真	13
手話と心のバリアフリー	五年	中池桜彩	14
何事にも挑戦	六年	松本奈夕	15
とどけ笑顔、未来へと	六年	池野颯斗	16
助け合いは笑顔を生み出す	六年	瀧川円楓	17
どんな人でも楽しく安全に過ごすには	六年	岡田萌衣	18



ボランティア活動	清須市立古城小学校	六年	中村奏太	19
家族のためにできること	北名古屋市立師勝南小学校	六年	齋藤美虹	20
私の幸せな悩み	弥富市立十四山西部小学校	六年	早川晶那	21

中学生の部

優しさから生まれる幸せ	一宮市立北部中学校	一年	松原弘将	22
あなたが思う思いやり	扶桑町立扶桑中学校	一年	松田実桜	23
思いやりの架け橋	岡崎市立北中学校	二年	新井こま璃	25
敬う心を	一宮市立丹陽中学校	二年	杉山舞音花	26
私の気付き	知多市立旭南中学校	二年	鈴木理世	28
人は人と生きている	尾張旭市立東中学校	二年	中村夏美佳	29
普通は存在しない	豊橋市立吉田方中学校	三年	鈴木美柚莉	31
年をとっても安心して暮らせる社会に	清須市立清洲中学校	三年	加藤穂夏	32

高校生の部

いつかまた、階段で	学校法人さくら学園安城生活福祉高等専修学校	一年	松岡愛弓	34
おじさんと私	愛知県立桃陵高等学校	二年	横井聖奈	35

審査経過				37
作文コンクール要項				38

みんなのえがお それがふくし

半田市長乙川東小学校二年

竹内 桃菜

わたしのお母さんはボランティアをしたりファミリーサポートで子どもをあずかったりほいく園のおくりむかえのおてつだいをしています。だからわたしも小さい子とすごすことがよくあります。

朝、その子の家におむかえに行つていそがしいおうちの人のかわりに、ほいく園までおつて行きます。ふだんはわたしは学校へ行く時間なので行きませんが、夏休み中は、ついで行つて、お手つだいしています。にもつをもつてあげたり、小さな子と手をつないで歩いてつれて行つてあげたりしています。

それがいでは、夕方にほいく園におむかえに行つて、わたしの家に子どもたちをつれてきて、夜ごはんをいっしょに食べてから、あそびながらおうちの人がむかえに来てくれるのをまっています。わたしはただ楽しくあそんでいるだけなのに、その子たちのお父さんから、

「いつもあそんでくれてありがとう。ももちゃんがいるから子どもたちがすごくよろこんで、ファミサポの日を楽しみにしてるんだよ。」と言ってもらえました。だれかのやくにたつて自分もこんなうれしい気もちになれるんだなと思いました。

どちらの兄弟も、もう一年ぐらい前から会っているの、なかよしになりました。わたしは小さい子が大きくなるので、手をつないで歩いたり、

いっしょにごはんを食べたり、あそんだりしていると、本当にかわいくて弟や妹ができたみたいですごうれいのです。

なぜファミサポがひつようなのかというと、小さい子どもをそだてるのは本当に大へんで大人が何人いても足りないくらいだからです。お母さんにわたしが赤ちゃんのころのことを聞いてみたら、

「ももちゃんは二ヶ月のころRSウイルスというびょう気で入ったの。その時は、二十四時間つきそいもひつようで、はなれられないし、お兄ちゃんのように園のおくりむかえもあつて、本当にたいへんだつたよ。おじいちゃんやおばあちゃんが近くにすんでいなかったら、ファミサポをたのんでいたと思うよ。」

と言っていました。わたしはそんなことがあつたんだとびっくりしました。それで、こまっている人のためにファミサポはすごくだいじなんだとわかりました。

ふくしは、ふだんのくらしをしあわせにです。みんなが、ふだんからいっしょにあわせでわらつていられる社会になってほしいです。まだわたしは子どもなので、できることは少ないかもしれないけれど、お母さんのファミサポのお手つだいをすることで、子どもたちやそのかぞくがえがおになるのがうれしいので、これからもみんなのやくにたちたいです。





だれかのえがおのために

長久手市立南小学校二年

大家 明奈

わたしは、一年生のふゆにかみの毛を35センチ切りました。なぜかと言うと、ヘアドネーションをするためです。

わたしが三さいのころ、びょう気のちりょうでおじいちゃんのかみの毛がぬけてしまいました。そのとき、おかあさんからヘアドネーションを教えてもらい、やってみようと思いました。それから四年かんかけて、かみの毛をのばしました。のばしているときは、かみの毛がからまらなようにトリートメントをして、きれいにのばすど力をしました。かみの毛が長くなってからは、おふるであらったり、かわかしたりするのが大へんでした。

かみの毛を切る日になって、目ひょうにしていたヘアドネーションがやっとできると思い、とてもワクワクしながらびょういんに行きました。びょうしさんに、きふができる31センチいじょうの長さになるようにはかってもらい、すこしずつたばにしてかみの毛を切りました。切っているときは、後ろが見えないので、ドキドキしました。そして切りおわってかがみを見てみたら、大切にしていたかみの毛がみじかくなっていて、とてもかなしい気もちになりました。切ったかみの毛を家にもちかえり、その日はかなしい気もちのまますごしました。

つぎの日、学校でかみの毛がみじかくなつたわたしを見て、先生やともだちはびっくりしていました。先生に、ヘアドネーションのためにかみの毛を切ったことを話すと、

「すごいね。かっこいいね。」

と、ほめてもらえました。先生に自分がしたことをほめてもらえて、それまでのかなしい気もちはなくなって、えがおになりました。

わたしは、かみの毛をみじかく切ただけでかなしい気もちになったけれど、びょう気でかみの毛がぬけてしまったり、はえてこなかったりする子はもつとかなしい気もちになっているのではないかと思いました。切ったかみの毛は、ふうとうに入れて、ウィッグをつくるかつどうをしているだん体におくりました。わたしのかみの毛が、今どうなつて、だれのところにとどいているかはわかりません。でも、ウィッグになつて、だれかがえがおになつているといいなと思います。

わたしは、またかみの毛をのばしています。四年後もう一どヘアドネーションできるようにがんばりたいです。



はく手

豊川市立桜木小学校 三年

服部

光桜

「ボランティアえんそう会に出てみない？」

二年生のまだまだ寒いある日、ピアノ教室の先生に、こう聞かれました。ようち園の年中の夏から習い始めて、三年半がすぎました。教室の発表会には三回出たけれど、すぐきんちようするので、少しなやみましました。すると、小学校がはなればなれになったお友だちも姉妹で出ると、先生が教えてくれたので、がんばることにしました。

そのころ、少しむずかしい曲を練習し始めたばかりで、それまでにできるようにならないといけないと思って、できるようになるのか心配していたけれど、先生に、

「さい近、合かくした曲からえらぼう。」

と、言ってもらえたので、たくさん練習してやっと合かくした「大きな古時計」にしました。

ちょうどそのころ、わたしのクラスが学級へいさと学年へいさになったので、いつもよりたくさん練習できました。

春休みに入った三月二十八日に、ボランティアえんそう会がありました。豊川市にある、ろう人かいごしせつでした。場所を聞いたお母さんが、三才のときになくなったひいおじいちゃんが、ときどき行っていて、赤ちゃんだったわたしも会いに行ったことがあると、教えてくれました。ひいおじいちゃんの話は、いっしょにとった写真や思い出話からしか感じられなかったけど、上手にひこうという気持ちが強くなった気がし

ました。

たて物に入ると、「ちいさなピアノニストのえんそう会」と画用紙がかざられていて、ちゃんとひけるか不安になっていました。えんそうじゅんが一番で、よけいにきんちようして、自こしようかいでいっしょに歌ってくださいと言うけれど、歌ってくれる人がいるかなと心配になりました。

一生けんめい、心をこめてひいたけど、少しまちがえてしまつて、くやしかったです。ひいている時は、集中していたせいか聞こえなかったけど、あとで動画を見せてもらったら、ピアノの先生といっしょに歌ってくれているおじいさんやおばあさんたちがいて、心がほんわかしました。

ほかのお友だちの時に、おじいさんたちを見たら、耳をすまして聞いたり、曲に合わせてゆらゆらゆれていたりと、楽しんで聞いてくれているのがわかりました。

その後、どじょうすくいおどりを見せる人たちも来て、おばあさんたちといっしょに手びょうしをしたり、ふりつけをまねしたりして、え顔がいっぱいの時間でした。

ピアノをひいた後のおじいさんたちはく手は、発表会の「練習がんばったね、おつかれさま。」のはく手とちがつて、「楽しかったよ、ありがとう。」と言われたみたいでした。またこんな会があったら、ぜったいにやりたいと思います。





一日アイマスク体けん

高浜市立高取小学校三年

杉浦 芽唯



わたしは、一日アイマスク体けんをしました。このテーマに決めた理由は、目が見えない人の気持ちを知らなかったからです。

この日は、朝起きてからすぐにアイマスクをつけてすごすことにしました。お昼にはおばあちゃんの家まで行って、いっしょにお昼ごはんを食べて帰ってくることにしました。

まず、アイマスクをつけて、朝ごはんを食べました。パンを食べ終わるとき、お母さんに、

「パンがまだのこっているよ。」

と言われました。わたしは全部食べたと思っていたので、びっくりしてのこっているパンをさがしました。牛にゆうは、自分で入れることにしました。入れる前に、どうしたらこぼさないように上手くそそげるのか考えてみました。コップの中に半分くらい人さしゆびを入れ、牛にゆうが人さしゆびにつくまでそそげば、いつもと同じりようを入れられると思います。やってみたらうまく入れることができ、うれしかったです。

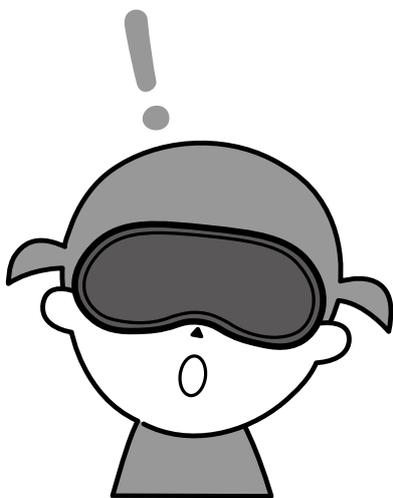
つぎに、おばあちゃんの家にお昼ごはんを食べに行きました。車にいるときは外が全く見えないので、どこにいるのかわからなくなりました。おばあちゃんの家は、まずかいだんを上ります。どこからかいだんが始まるかわかりません。なので、お母さんが「かいだんがくるよ。」とか「もう終わりだよ。」と言って教えてくれました。家の中に入ったら、おばあちゃんちにやっと着いたなと思ってほっとしました。でも、部屋な

のかまだろうかなのかわからず、いつものリビングにたどりつけませんでした。わたしがうろろろしていたので、と中でおばあちゃんが手伝ってくれてリビングにつれて行ってくれました。

おばあちゃんちのお昼ごはんは、おにぎりとサラダとイカフライととうふでした。一番食べにくかったのはおにぎりでした。おにぎりは、お米がポロポロこぼれてしまったからです。米つぶがこぼれていることもわからないし、どこかにくっついていいるのもわかりませんでした。みんなに教えてもらって、なんとか食べ終わりました。

家に帰ってお姉ちゃんとおふろに入りました。見えないけど、お姉ちゃんがいてくれると思うと安心して入れました。それに、点のつぶつぶがついているから、教えてもらわなくても、どれがシャンプーかわかりました。

アイマスク体けんの日には、目が見えなかったから、不安な気持ちになつてとても心細かったです。だれがどこにいるのかわからなくなつて、どこに話しかければいいかもわかりませんでした。目の見えない人が、くらしやすい生活をおくるためには、いろいろな工夫があるなと思います。周りの人の手助けやもうどう犬、点字があると、とても助かると思います。



理学りようほうしという仕事

田原市立童浦小学校三年

立岩 映人

ほくのお母さんは理学りようほうしです。理学りようほうしは、けがやびよう気で体がふ自由になった人のリハビリなどの手助けをすることが仕事なのだそうです。そう聞いても、実さいにどんなことをしているのか、いまいちピンときません。そこで、ほくはデイサービスではたっているお母さんの仕事を見に行くことにしました。

お母さんがはたらいているデイサービスは、お年よりが自分の家からリハビリに通うところです。お母さんは、お年よりが運動をするときにいたい所があったり、うまく動かないところがあったりするときに、なるべくスムーズに動かせるようにするための運動の指どうをしています。お母さんは、

「びよういんのリハビリとちがうところは、お家での生活をできるだけ長く、できるだけ豊かにすごせるようにお手つだいすることだよ。」と教えてくれました。なるべく長く、自分の力で動ければ、買い物や家のこと、身の回りのことが自分でできます。また、お出かけや畑仕事など、自分の好きなことも続けられます。そのためのリハビリなのだそうです。そして、運動だけではなく、お年よりが楽しく話すことも大切なリハビリということがわかりました。一人でくらししている人は、家の中で話すことも少ないので声が出にくくなってしまうそうです。デイサービスで楽しく話すことで声も出るようになるそうです。お母さんは、お年よりの運動についているときも、ただ話しているときも、とても楽しそう

でした。ほくも、お年よりと話してみました。きんちようして、いつものように話せませんでした。知らないお年よりと、どんなことを話せばいいかわからなくて、こまってしまいました。でも、お母さんは、たくさんのお年よりにいていねいに声をかけ、うれしそうに話を聞いていました。話すことも大切なりハビリ、とわかってるから、話すことを大事にしているんだなと思いました。ほくはうまく話せなかったけど、お年よりはみんなやさしくしてくれました。

でも、大へんなこともあります。お年よりが運動中にけがをしないように、よく気をつけなければいけないことです。ゆかに何かあるとつまずいてしまったり、立ったときにふらふらしてしまったりする人もいました。だから、スタッフの人はお年よりが動くのをよく見ていました。そして、ひつような手だすけをしたり、声をかけたりしていました。

ほくはお母さんの仕事を見て、学校で習った福しの意味「ふだんのくらしをしあわせに」にとっても当てはまっているなと思いました。理学りようほうしという仕事が、こんなにしあわせなものとは知りませんでした。ほくもお年よりに「ありがとう」と言われているお母さんを見てしあわせな気もちになりました。





おじいちゃんをつえになれたぼく

愛西市立佐屋小学校三年

浅野 弘武

ぼくのおじいちゃんは、いつもぼくにおいしいお米やお野菜を作ってくれます。この夏休み、おじいちゃんに大へんな事がおきました。ころんで農具に足をぶつけて、足を切ってしまい手じゅつをしたのです。ぼくは、お母さんとびょういんに行きました。いつもいっばいわらって元気なおじいちゃんが、手に点てきをつなげて足はぐるぐるほうたいでまかれていて、とつてもいたそうでした。ぼくは、おじいちゃんのすがたを見て、何も話せなくなり目がなみだでいっばいになりました。でも、おじいちゃんに早く元気になってほしいので、家でまっている弟とテレビ電話をつなげて、

「いたいのいたいのとんでいけ！エーイー！」

と愛のパワーをとどけたら、おじいちゃんは、

「ありがとう。元気になったぞお。」

とよろこんでくれたので少し安心しました。

ぼくは、おじいちゃんの事が大大大大好きなので、たいいんしてから何か助けてあげたいと思って、おじいちゃんに、

「何かお手伝いできる事ありますか？」

と聞いてみました。おじいちゃんは、

「じゃあおじいちゃんの右足になって、いっしょに歩いてほしいなあ。」
 と言ってくれたのでぼくは、おじいちゃんをつえになりました。おじい

ちゃんの手を、ぼくのかたにおいて、

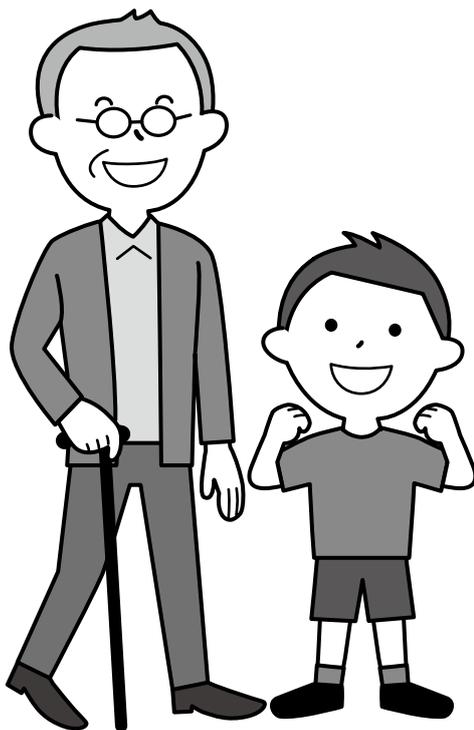
「いちにいちに……」

と声をあわせて、二人でゆっくりいっしょに歩きました。

ぼく一人で歩くことはできるけど、相手の事を考えて助けながら歩く事は、とつてもむずかしい事だなあと感じました。今は、少しずつ回ふくしてきたけど、これから先、どんどんおじいちゃんになって歩く事がむずかしくなるかもしれないので、その時にはいつでも、ぼくは、おじいちゃんをつえになっておじいちゃんを、温かい気持ちでささえていっしょに歩いていきたいなあと思いました。こまっている人がいたら、

「何か手伝える事ありますか？」

とやさしい言葉もかけていきたいです。



誰かのために

岩倉市立曾野小学校四年

横井

健

ぼくは、「福祉」と言われてもよく意味が分からなかったのですが、まずは、インターネットで調べてみました。「福祉」とは、「誰もがもっている幸せになれる権利」だそうです。そして、「福祉」は、誰のためにあるのかというと、世界中のみんなのためにあるそうです。

四年生になって、福祉実践教室で点字を習いました。点字教室では、点字の道具や点字の読み方などをくわしく教えてもらいました。目の見えない人が文を読んだりするために点字は大切だと思いました。でも、正直言って、自分の周りには、点字や車いすを使っている人がいないのであまり身近ではないと思っていました。

「福祉」について調べていたら、「ボランティア」という言葉がたくさん出てきました。ボランティアと言えば、ゴミ拾いぐらいしか思い浮かびませんでした。それで、「ボランティア」について調べてみました。「ボランティア」とは、よりよい地域や社会、世界を作るために、自分から進んで行う活動で、お金のためではなく、役に立ちたいという気持ちから行うものだそうです。そう考えてみると、ぼくが入っているスポーツ少年団のかんとくが思いうかんできました。そこで、どうしてかんとくをやってくれているのか聞いてみることにしました。かんとくは、毎週土日、暑くても寒くてもソフトボールの練習でノックをしたり、ピツ

チャーをやってくれたりして、たくさんのかんとくをぼくたちに教えているのでとても大変です。自分の子どもが団にいるわけではないし、お金ももらっていないのに、どうしてかんとくをやってくれているのか気になりました。

かんとくは、「お母さんはお金をもらってご飯を作っているか？お金をもらって洗たくをしているか？」と聞いてきました。僕のお母さんは、お金をもらわずご飯や洗たくをしてくれます。「それは、家族のため。」とお母さんは言いました。また、かんとくは、「わたしは、五条川をきれいにしている人達と同じでボランティアだよ。」と教えてくれました。五条川をきれいにしてくれるのは、岩倉市や五条川を大切に思っているからだと思います。ぼくは、かんとくがぼくたちにソフトボールを教えるの、地域の子どもたちを大切に思ってたかんとくを打ってくれたり、教えてくれたりしてるのかなと思いました。

「かんとくをやってくれる人がいないから、かんとくをやっているだけで、ほかにやってくれる人がいれば代わるよ。」と笑いながら言っていました。ぼくたちのために思ってくれているかんとくの気持ちがよく分かって、うれしかったし、ありがたうという気持ちになりました。

ぼくは、最初、「福祉」や「ボランティア」は、身近にはないと思っていました。でも調べたり聞いたりしてみると、すぐ近くにあつてとても身近なことだと思いました。かんとくやスクールガードさんたちなど、ボランティアをしてくれている人は、地域の子どものためにたくさんのかんとくをやってくれていることが分かりました。だから、今度は、ぼくが誰かのためにボランティアをやってみようと思います。



ヘアドネーション

清須市立桃栄小学校 四年

新井 莉那



わたしは、二年生のときにかみの毛のきふをしたことがあります。かみの毛のきふとは、小児がんや生まれつきかみの毛がない病気、事なかどでかみの毛を失った子どもたちに、お金をもらわずにかみの毛をプレゼントする活動のことです。きふされたかみの毛はウィッグを作るために使われます。

この活動はアメリカで始まりましたが、あまり知られていなかったため、かみの毛のきふが少なく、日本でさいしょのウィッグがかんせいするまでに四年もかかったそうです。その後、日本では、女ゆうなど有名人がさんかしたことで、たくさんの人に知られるようになり、きふがふえていったそうです。きふするかみの毛は、三十一センチ以上という決まりがあります。でも女の子用のウィッグを作るためには、三十一センチよりも長いかみの毛を必要とするため、受け入れ先の中には、三十一センチちょうどで切らずに、もつとのばせる人は、のばしてきふしてほしいとあん内しているところもあります。

わたしは、お母さんの知り合いの美よう院に行きました。それまでかみの毛を切ったことがなかったので、はじめての美よう院でした。わたしのかみの毛は、こしまでの長さがありました。とても長くて洗ったりドライヤーをかけたりのが大変でしたが、長いかみの毛がお気に入りでした。でも、お姉ちゃんが一年生のときにヘアドネーションをして見たのを見て、わたしもいつかきふして病気などで苦しんでいる人たち

の役に立ちたいと思っていました。

かみの毛を切る前は、きんちようしていましたが、どんな子がわたしかみの毛のウィッグを使うのかなと思うと、わくわくしてきました。切るときは、まずはじめにかみの毛をよくとかしてから、いくつかのたばにまとめました。そして、お姉ちゃんとお母さんと自分で一たばずつはさみで切りました。のこりは、美ようしさんに切ってもらい、こしまでのびたロングヘアから五〇センチのヘアドネーションをしました。

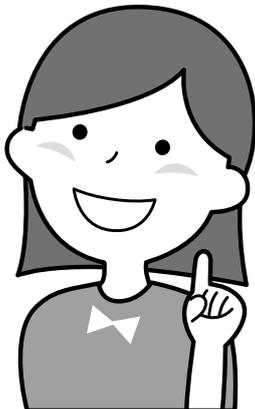
切る前の日には、お母さんといっしょにお風呂に入り、

「これまでわたしかみの毛をとかしてくれたり、シャンプーをしてくれたりしてありがとう。」

と伝えました。お母さんは、少し泣きそうになっていました。お母さんは、

「やわらかくて、ふわふわで、くりんくりんのかみの毛が大すきだったよ。」

と言いました。わたしは、とてもうれしかったです。でも、いろいろなことを考えていると、病気で苦しんでいる人がいることが悲しくなりました。わたしかみの毛で、病気の人が少しでも元気になれるとうれしいです。



点字から広がったなりたい自分

豊川市立東部小学校五年

井上 尚希

「……」
これは、点字で表したほくの名前です。

今年の五月に学校で福祉実践教室がありました。ほくは点字について学習しました。

はじめに、視覚しよう害者についての話を聞きました。ほくは、目が不自由な人は、みんな全く見えていないと思っていました。ところが、目が見えない人と一言で言っても、ぼやけているけれど少しは見える弱視の人がいれば、全く見えない全もうの人もいるということを知りました。

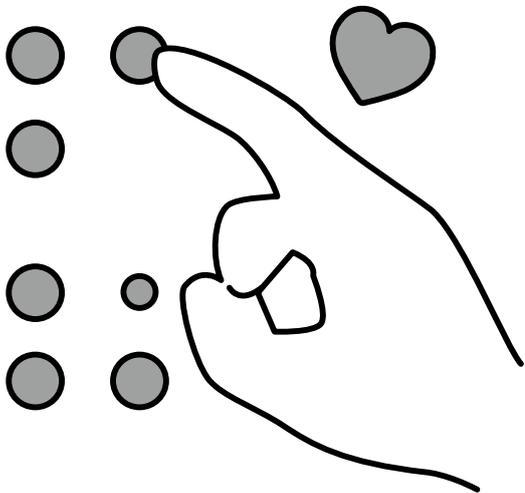
次に点字について説明がありました。点字はたてに三マス横に二マスの計六マスの中で打ちます。ほくは、これまでエレベーターのボタンのところにあるでこぼこは、だれかがいたずらしてできたものだと思っていました。でも、説明を聞くうちに、あのでこぼこは点字だということに気づきました。

また点字には漢字がないことも知りました。点字の本を見せてもらったら、真っ白の紙にびっしり点字が打ってありました。漢字が使っている本を点字で書くと、約二倍のあつきになるそうです。ほくには、指先だけであんなにたくさん点字を読むことはできそうもないと思いました。でも、目が見えなくても本が読めるように工夫されていることがすごいいました。

最後に、点字を打つ道具を使って、実際に自分たちで点字を打ってみました。点字は少しあつい紙のうら面から打つので、左右がぎやくになります。点字のお手本を見ながら、自分と家族の名前を打ちました。初めてだったけれど、まちがえずに打つことができました。

家に帰って身の周りのものをよく見てみると、ほくが気づいていなかっただけで、点字は色々なところで使われていました。例えば、ビールのかんには「おさけ」、ジャムのびんには「ジャム」、ふりかけのふくろには「ゆかり」と点字で書かれています。また、浴室だんぼうのリモコンには、だんぼうのところは「だん」、かんぼうのところは「かんそ」と書いてありました。

福祉実践教室を通して、今のほくが、目の不自由な人のためにできることは少ないけれど、まずは相手について知ることがとても大事だと思いました。ほくは、こまっている人を見かけたら、積極的に手助けできる大人になりたいです。





認知症サポーター養成講座を受けて

北名古屋市立栗島小学校五年

湯川 瑛眞

私のひいおばあちゃんは、認知症です。私が生まれたときには、すでに認知症になっていました。

おさないころの私は、認知症を理解していなかったのですが、ひいおばあちゃんに冷たい態度をとってしまうことがあったと家族から聞かされました。お正月やお盆にひいおばあちゃんに会うと、

「あなたは何さい?」

「名前はえまちゃんだっけ?」

と質問せぬにいます。最初はふつうに答えられるのに、何度も何度も聞かれるうちに

「その質問、もう五回目だよ」

などときつく言ってしまう、ひいおばあちゃんはそれを聞いて

「きつい性格だねえ」

とつぶやいていたそうです。今になって考えると、申し訳ない気持ちになります。おさない私は、何度も同じことを聞かれることにイライラしてしまっただけでしょう。やさしく接することができませんでした。

ひいおばあちゃんは今、グループホームで生活をしています。面会に行くと数時間だけ一緒に外出することができます。そのとき、私は困ることがあります。それは、ひいおばあちゃんが知らない人に話しかけて、同じ話を何回もしてしまうことや、急に歌い出してしまうことです。周りの人が困った顔を見ると、私はあせってしまいます。変な人だと思わ

れてしまうのではないかと思ひ、

「しーっ、歌わないで」

とついつい言ってしまう。ひいおばあちゃんには悪気はないのに、どうしても周りの目が気になってしまふのです。

四年生のころ、小学校で認知症サポーター養成講座を受けました。みんなが認知症について分かってくれて、私はほっとしました。みんなが認知症について理解することで、認知症の人へやさしい気持ちで接することができたらしいと思つたからです。講座では、認知症の人への接し方のポイントを教えてもらいました。私は今、この講座で学んだことを心がけています。中でも一番気を付けていることは、やさしく話すことです。

何度かひいおばあちゃんと話しているうちに、気付いたことがあります。昔のことはよく覚えていふのです。私のお父さんが小さいころの話を楽しそうに話してくれまふ。ひいおばあちゃんの中では、私のお父さんは子どものままで止まっただけなのです。そのため、結婚して子どもがいて、その子どもが私であることを教えてあげると、少しおどろいてうれしそうな顔をしてくれます。

講座で聞いた実際の体験談は、私のひいおばあちゃんと全く同じで、共感できるところがたくさんありました。同じ気持ちの人がいることを知り、心強ひと感ましました。

人はだれでも認知症になる可能性が有ると思ひます。もしも、私の周りに認知症の人がいたら、まふは見守つて、笑顔で声をかけることを心がけ、やさしく安心感を与えられるようにしたいです。そして、相手の話をよく聞いて、ゆつくり接したいと思ひます。

今度、ひいおばあちゃんに会つたら簡単にできる遊びを一緒にしたいと思ひています。例えば、しんけいすいじやく、ぬり絵、折り紙、ひも通し、パズルなど、ひいおばあちゃんとやりたいことがたくさんあります。私と楽しい時間を過ごすことで、おばあちゃんの笑顔が増えていくと思ひます。

手話と心のバリアフリー

扶桑町立山名小学校 五年

中池 桜彩

耳が聞こえない人がいることを私が知ったのは、六才の時のことだ。ある歌手のふりつけに手話が使われていたのを見たのが最初だった。

「ママ、手話って何？」

母から耳が聞こえない人が使う手の会話があることを聞き、頭の中で時が止まった。

どういうことか知りたくて、テレビの音を消し、字まくを出した。しかし、六才の私に全ての漢字は読めなくて、文字もあつという間に消えてしまうから、何を言っているのかが、さっぱりわからなかった。

扶桑町の手話サークルが小学校に来ることを知り、それを楽しみに入学したが、コロナで休止になりガッカリした。そんな中で犬山市で手話こうざがボランティアで行われていることを知り、母と参加した。

耳が不自由な人には、全く聞こえない「ろう者」と聞こえにくい「難ちよう者」がいる。そのこうざの先生はろう者で、私くらいのまごがいるおじいさんだった。小学一年生の私に二時間の授業は眠くなる時もあったが、みんなが優しくしたので、全六回を最後までがんばることができた。先生は明るく面白い人で、手話と表情でたくさん笑わせてくれた。しかし、耳が聞こえないことで苦労した話を聞いた時は、みんなが悲しい顔になった。先生が最後の日に「私たち障害者はこうして手話を勉強しに来てくれたり、歩みよってくれたりすることがうれしんだよ」と話してくれた時に、私は手話こうざに参加して良かったと心から思った。

私は五才からダンスを習っている。昨年二宮市のストリートダンス協会から福祉のイベントにさそわれて、障害のある子供たちとノリノリで楽しいダンスを全力でおどり、ヨアソビのツバメという歌を手話で一人でひろうした。初めて人前でやる手話にきんちようで手がふるえたが、会場全体から温かい手びようしをもらい、思いをこめた「手歌」ができた。「感動した」という言葉をもらい、自分のパフォーマンスで何かが伝わったことがうれしかったし、これがきっかけでだれかが手話にきょう味を持つてくれたらいいなと思った。

NHKの番組で、ろう者、難ちよう者のさまざまな生活を見た。親が耳が聞こえないという子や、死を考えたことがある高校生もいて、たくさんのかべと、当たり前が通じない世界に心がいたくなった。ゾツとした話もある。駅のアナウンスや非常ベルのきんきゅうの知らせが聞こえないことや、エレベーターの非常ボタンをおしても、インターホンで相手と会話ができないことを知った時は、とてもおそろしかった。だから困っていたら手話で助けたいと思って勉強を始め、二年生の時に手話技能検定六級、三年生の時に全国手話検定五級に合格した。四年生の時は試験当日に高熱が出て受けられなくて布団の中で泣いた。またチャレンジしたい。

今も南海トラフ地しんや線状こう水たいでたくさんさんの障害者が不安になっている。私もこわいので大災害が来ないようにいのっている。

二〇二五年は耳が不自由な人のデフリンピックが初めて日本で行われる。デフリンピックは先日までオリンピックが行われていたパリで、一九二四年にスタートし、来年の東京大会は記念の百周年大会となる。たくさんさんの耳の不自由な選手が世界各国から日本へ来るので、国際手話も少し勉強して選手を応援したい。障害者は同じ日本に住んでいても、外国にいる気もちでくらししていると聞いたことがある。私は学校で英語を習うように、障害者の世界や文化のちがいを知り、コミュニケーションをとることが大切だと思う。色々な障害をもつ人が、心から何かを楽しむためには、建物のバリアフリーだけでなく、心のバリアフリーも大切だと思う。だから私は、出会った「手話」を通じて、心のバリアフリー活動もしたい。



何事にも挑戦

一宮市立富士小学校六年

松本 奈夕



私は、昨年の一宮市スポーツ協会表しよう式で小田凱人選手によるトークショーに出席しました。小田選手は、一宮市出身で九才の時に左あしこ関節の骨肉しゅと診断され、その後左あしの一部を切除する手術を行い、障害者となった話を聞きました。今まで私は、障害者の方と接する機会があまり無かったので、とてもショックを受けました。しかし、小田選手は、こうき心あふれ、ポジティブ思考でその苦しい時を乗りこえました。この夏開催しているパリのパラリンピックの選手として出場しています。出場種目である車いすテニスとの出会いは、病院の先生から動画を観せてもらった時「かっこいい」と思ったこうき心から始めたそうです。現在、小田選手の活やくは、みんなを元気にしてくれています。もちろん、私も新聞などで優勝の記事を見つけた度に、自分もがんばろうと勇気をもっています。なので私も、苦しんでいる人、困っている人を助きたい。力になりたい。と思い、この夏休みから、看護師体験、認知症サポーター養成講座、こどもボランティアスクールへ参加する事にしました。

看護師体験で一番印象に残ったのは、患者さん一人一人に声をかける時の対応の仕方です。少し距りのはなれた高れいの患者さんには、大きな声でゆっくりと話しかけて気になげながら、目の前にいる患者さんの治りようもしていました。患者さん達の不安や痛みを理解している姿に、看護師という職業には、治りようだけでなく患者さんの心に寄りそう奥

の深さを感じました。それは、患者さんの人生を尊重し、話しやすい環境や関係性をつくることの大切さ、また、思いやりの心を持ち、信頼される看護師さんの姿を学びました。

認知症サポーター養成講座では、脳のしくみ、認知症の症状や予防、関わり方、ケアに関する内容までさまざまな事を教えていただきました。その中で、認知症当事者の方の体験談を聞く事が出来ました。その方は、十年前に認知症と診断された方ですが、見た目では、認知症かどうか全くわかりません。でも、認知症という事をかくさずに生活をし、周りのサポートを受けながら、毎日を楽しく生活してみえるそうです。認知症は、治らない病気ではあるけれど、進行をおくらせることは出来ます。なので、治りようしていく中でも、ふ通の生活が送れる事も知りませんでした。もちろん、周りのサポートは必要です。おどろかせない。いそがせない。相手がいやだと思ふことは言わない。この三つを守って私も接していきたいです。認知症キッズサポーターとして、認知症について知らない人や間ちがつて理解している人に、今回学んだ事を生かして、伝えられたらうれしいです。

これから始まる、こどもボランティアスクールでは、障害者の方とカレを作ったり、車いすツインバスケットをしたり、街頭募金のお手伝いが出来るので、とても、楽しみな気持ちと心が引きしまった気持ちでいっぱいです。

今すぐには、人の役に立てる事は少ないかもしれませんが、障害や年れいに関係なく、みんなが笑顔で手を取り合える社会になってほしい。その力に私もなりたいたいと強く思いました。

とどけ笑顔、未来へと

犬山市立犬山西小学校六年

池野 颯斗

五年生で経験した福祉体験教室は、ぼくの心の中で大きな変化があった、貴重な時間となった。それまでも、学校の授業や調べ学習で、街中の点字ブロックについて調べたり本で知識を得たりする機会はあったが、実際に福祉体験をするのは、この日が初めてだった。しかもぼくが体験するのは、あまり身近に感じてこなかった「要約筆記」だ。話を紙に書き取るという方法は知っていたが、正直ピンとこないまま体験に臨んだ。

ところが、間近で見せていただいた要約筆者の方の姿は、ぼくの想像をはるかに超えていた。話し手の話すスピードが速くて、全てを書き取るのが不可能なとき、言いたい内容をすばやく理解し、正しく分かりやすく要約をするのだ。ぼくは、この技術に、ただただ圧とうさればなされた。

この経験を通して、あることに気付いた。ぼくが人と会話をしている前の生活をしているように、障害のある方達にとって「要約筆記」や「手話」を使うことは、社会とのつながりをもつための役割を果たす、必要で当たり前のことなのだ。人とコミュニケーションを取る方法だけが、ほんの少し異なるだけだ。だからこそ、要約筆記や手話を使っていることを、ちがうもの・特別なもの、として偏見の目で見るのではなく、同じ世界に生きる仲間として、自然で当たり前、という考え方が広がってほしい。

そしてもう一つ、改めて感じたことがある。それは、障害がある方も、そうでない方も、大人も子供も、希望を持って生きていくためには、「せだ」と感じながら生活できることが、何よりも大切だということだ。だけれども、その権利を持っているはず。幸せの形は一人一人ちがっても、幸せを多くの人と分かち合うことで輪が広がるにちがいない。そんな世界をつくっていくためには、ぼく達の行動が重要なのだと思う。何も知らないまま、「どうせこういう風だから…」と思いついてしまわないで、どんなことも、まず正しく知って関わっていく。そういった心がけを重ねていく事が大切はずだ。

この体験の後、困っている人や助けを必要としているかもしれない人を見かける機会が増えた気がする。それはきっと、自分が周りを見ようとする気持ちが生まれたからかもしれない。さりげなく声をかけたり、病院でとびらを開ける援助をしたり、ぼくに出来ることはほんの小さなことだ。しかし、どんな場面でも、見て見ぬふりをしない小さな勇気が必要なのだと実感している。世界を変えるくらい大きなことをすぐに行えるわけではない。それでも今、何を必要としているのか、何をしてあげるべきなのか、まずは、人の気持ちを真剣に考え、思いやる行動をする。そんな努力が歯車となり、笑顔が広がっていくと信じて、一歩、勇気をふみ出したい。





助け合いは笑顔を生み出す

新城市立東郷東小学校六年

瀧川 円楓



今年の福祉体験教室は手話をやりました。まず感じたことは、手話は障がいのある人にとってはなくてはならないものということです。聴覚に障がいのある人同士では、相手とのコミュニケーションに手話を使います。手話は、自分の気持ちを伝える一つの手段です。そんな手話のメリットを考えてみました。一つ目は自分の伝えたいことをしっかりと伝えられるということです。障がいのある人はもし話したとしても自分の声が聞こえません。そのため自分の話していることが、しっかりと伝えられているかが分かりません。ですが、手話を使えば、自分の伝えたいことを、自分の目で確かめることができるので、安心して相手に伝えることができます。二つ目は、相手が伝えたいことも分かりやすいということです。他の人の声が何一つ聞こえない人でも手話で伝えてもらえば、しっかりと伝わります。

ですが、そんなメリットとは逆にデメリットもあると気がつきました。それは、障がいのない人には分からないということです。障がいのない人はふだん手話を使いません。なので、もし手話を使って伝えようとしても伝わりません。だからもっと手話を広めて、障がいのある人も生きやすい世界にしていきたいと思いました。

例えば、もし困っている人を見つけたときに、
「だいじょうぶですか。」

と伝え相手の伝えたいことをしっかりと理解してあげるといことです。

そうすれば、障がいのある人も安心して、笑顔になれるのではないのでしょうか。そしてその笑顔で自分も笑顔になれるのではないのでしょうか。人と人が助け合うことで笑顔を生み出すことができます。それは、手話だけではありません。障がいのある人もない人も、同じです。困っている人を見つけたら、

「だいじょうぶ。どうしたの。」

と声をかけ、助ける。そうすると、その人から、

「ありがとう。」

という言葉がでて、おたがいに、あたたかい気持ちになります。このように、手話だけではなく、障がいのある人もない人も、困っている人がいたら、相手を理解して助け合うことが大切だと思います。

この体験を通して、手話というのは、自分の気持ちを伝えることができるもので、それを理解してあげることが私達にできることだと思えました。これができたら障がいのある人も生きやすく、明るい世界になると思います。助け合いながら生きること、世界中に笑顔が広まるかもしれません。



どんな人でも楽しく安全に過すには

高浜市立翼小学校六年

岡田 萌衣

私は歩道橋について二つの意見を聞いた。

一つ目は視覚障がい者の人にとっての意見だ。視覚障がい者にとって歩道橋とは、手すりをもって進むだけで、安全に反対の道路に行けるというとても便利なものだ。

一方二つ目の意見は肢体不自由者の人の意見で、車椅子や杖を使っていると階段はとても上りにくいし、坂になっていても角度が急などの理由でとても不便だと聞いた。

どんな人でも、安全で便利に生活するには、どのようにするといいのだろうか。私は、どんな人でも便利に使えるものを作るといいんじゃないかと思った。けれどたくさんさんの障がいの種類があるので、正直難しい。シャンプーにはリンスと区別するために、印がついていて、トイレなどの公共施設には点字がついていて、視覚障がい者の方の役に立っている。スロープや手すりは肢体不自由者の役に立っている。このようなことが分かり、どんな人でも便利に使えるものを作るより、障がいの種類やその人にあったものを作る方がとてもいいと、思った。

すると、ある疑問が浮かんできた。障がいを持つている人は何をして楽しんでいるのだろうか。聴覚障がいの方はテレビを字幕で見れるしゲームもできる。けれど視覚障がい者の方はどのように楽しいことをしているのだろうか。そう思った時私は去年テーブルテニスをしたことを思い出した。それは、障がい者の方の理解を高めるグループが企画した、視覚

障がい者のスポーツ体験だ。卓球と同じようなルールで、卓球台のネットの下が空いていて、目を隠しボールの音でどこにあるか考えて打ちかえすものだ。最初はとても難しく全く当たらなかったけれど、やってみるうちに慣れてきて、最初に比べるとだいぶ打てるようになった。たくさん経験のある視覚障がい者の方は目が見えているのかと思うくらい強かった。これを経験した私は障がいがある人でも楽しめるスポーツがあるんだと思った。

たくさんの方が楽しく安全に生活するためには、正しい知識を持ち積極的に体験などに参加することがいいと思った。気持ちを想像し、寄り添ってあげること、障がいを持っている人も安心できると思う。これからもたくさんの方が安全で楽しく生活できるよう、いろいろなことを学んで行動に移していきたいと思った。





ボランティア活動

清須市立古城小学校六年

中村 奏太

ぼくは、七月二十七日に石川県志賀町で肉うどんの炊き出しに行き、二十八日は名古屋の栄で路上生活者支援の二つのボランティアに参加しました。

まず、石川県志賀町の富来支所では十数名の人がダンボールで部屋を囲み、ひなん生活をしています、その人たちは家が半壊、もしくは、全壊のため富来支所に七月二十七日で二百九日も生活しています。ちょうど同じ時期に、行政のサポートで名古屋市役所の人たちが一週間交代で来ていました。ひなん者の人はだんだん少なくなり、家に帰る人もいて、一見復興が進んでいるように見えますが、まだ自宅では水がにごったりして、水道水を飲んだり料理に使ったりできない人たちがたくさんいます。なので、富来支所では二カ月前までは給水トラックが、今では飲料水が出る蛇口が設置されています。ぼくが富来支所に炊き出しに行くのは四回目です。炊き出しでのぼくの主な役割は調理器具の洗い直し、うどんのめんを容器に入れる、富来支所で生活している人たちに優先的に肉うどんを配る、炊き出しに来た子どもたちにおかしのつかみ取りを案内する、小さな子どもたちのサポート、炊き出し後の洗い物と床そうじなどです。このような作業をして炊き出しに参加しました。まだまだ石川県の復興は進んでいないので、これからもボランティアに参加したいです。

次に、七月二十八日の名古屋の栄地域の路上生活者支援に参加しまし

た。今回は、二百食のお弁当とお茶をふくろづめするところから始まり、路上生活者支援に参加するのも三回目になります。並んでいるこの暑い中家がなくて少しでもがんばってほしいという気持ちで渡しました。これからも路上生活者支援は、ずっと続くと思います。また参加し、支援したいと思います。

ぼくがこれから参加する予定のボランティアは、十一月に行われる石巻市の復興支援です。東北はすでに復興が終わったと言われていますが、実際はまだまだです。だから、自分の目で現地の人たちの話を聞いたりすることで、感じたり考えたりしたことを自分の勉強にしていきたいです。

ぼくは、ボランティア活動を通して、被害にあった場所へ行き、苦しい生活をしている人に会いました。ぼくが食べ物配ったり、案内をしたりするとひなん者の方が笑顔を見せてくれました。その笑顔を見て、だれかのために力になれることうれしさを感しました。福祉とは、一人一人の幸せな生活を大切にすることだと思えます。ぼくもだれかの幸せな生活を守るお手伝いをしたいです。これからも、ボランティア活動を通じていきたいです。



家族のためにできること

北名古屋市立師勝南小学校六年

齋藤 美虹

私の祖父は、七十六歳です。三年前に、アルツハイマー型認知症と、病院で診断されました。私が、祖父の病気について母から教えてもらったのは、私が学校で福祉体験をした後のことでした。

私の父と母は、福祉関係の仕事をしています。だから、小さい頃から、介護という言葉が自然と耳に入ってきました。祖父とは、よく一緒にご飯を食べたり、旅行に行ったりしました。幼稚園や学校の行事にも、いつも来てくれていました。とても優しく、静かな祖父です。私が五年生になった頃から、祖父母の家に遊びに行くことが減りました。久しぶりに遊びに行くと、祖父は、一人で出かけて二時間くらい帰って来なかったり、服を前後ろ逆に着ていたりした時があつて、不思議に感じていました。突然怒ることもありました。なぜだろうと思つて、父と母に聞いたら、

「じいじに、それは違うよとか、前にも言ったとか言わずに、話を聞いてあげてね。」

と言われました。その時は、祖父が、どうしてそうなつてしまったのだろうと思ひました。

私は、福祉体験で、いろいろな言葉を知りました。福祉体験の後、母と話をしたとき、

「前に話した、じいじのことだけれど、じいじは病気なの。アルツハイマー型認知症という病気なのだけれど、分かるかな？」

と言われました。私は、くわしく知りたかったので、祖父の病気を自分で調べました。認知症の症状や認知症の人に言わないほうがよいこと、認知症になりやすい人など、いろいろなことを知りました。祖父の行動と似ていることも書いてありました。家族が疲れてしまうことも知りました。今、祖父と祖母は二人で暮らしています。祖父は、祖母の姿が見えないとすぐ探したり、ご飯を食べたことを忘れてしまつたりするときがあります。私は、祖母のことも心配になりました。

私は、まだ小学生だけれど、自分にできることは何かないかを考えてみました。次の三つを、忘れないようにしたいです。一つ目は、しっかりと目を見てあいさつをすること。二つ目は、分かりやすい言葉遣いで、ゆっくり話をすること。三つ目は、笑顔で話をして、安心させてあげることに。いつもどおりの私でいよう、祖父の気持ちを大事にしようと思ひました。祖父が、

「ご飯をまだ食べていない。」

と言つたら、私は、祖父の立場になつて考えてみようと思ひます。正解ではないかもしれないけれど、

「お腹すいたの？」

と言つてみようと思ひます。

これからは、もっと福祉について、勉強してみたいです。祖母のためにできることはないかなと考えました。できるだけ、会いに行きたいし、電話をして話したいと思ひます。祖母も毎日疲れていると思うので、助けてあげたいです。

私の祖父は、認知症です。祖父は、認知症や福祉、家族について考えるきっかけをつくってくれました。ずっと、長生きしてほしいです。私は、大人になつても、相手の立場になつて気持ちを考えられる人になりたいです。



私の幸せな悩み

弥富市立十四山西部小学校六年

早川 晶那

私の曾祖母、としこひいおばあちゃんは、学校の近くにある老人ホームに住んでいます。私が初めて祖父とひいおばあちゃんに会いに行った時、ひいおばあちゃんは私のことを、私の母だと思ったようで、私の母の名前を呼んだことが印象に残っています。

帰りの車の中で、私は「私」をひいおばあちゃんに覚えてもらいたい、と思いました。次に老人ホームを訪れた時、事前に絵をかいた風船を持っていき投げて遊びました。

その次はあやとりを持って行き、ほうきを作ったり二人あやとりをしたりして一緒に遊びました。ひいおばあちゃんはあやとりがとても上手で、器用に指先を動かすことができ、びっくりしました。私は毎回

「ひ孫の晶那だよ。」と伝えました。

そして何度か訪れた時、ついに私のことを覚えてくれていて、「私」と「晶那」がひいおばあちゃんの中で結びついたことがとても嬉しかったことをよく覚えています。そして、老人ホームの職員さんに、

「としこさん、ひ孫さんが来るのを楽しみにしていたみたいで今日来ることを知って、嬉しくてずっと車いすを自分でくるくる回して待っていたよ。」

と教えてもらいました。老人ホームは快適な室温で、とても過ごしやすいです。けれども、そ

こに住んでいると外に出ることができません。私だったら、それは寂しいことだなと思い、どうしたらひいおばあちゃんに季節を感じてもらえるだろうと帰りの車の中で考えました。

それから私は、ひな祭りのある三月には折り紙と厚紙、桃の花のシールを持って訪問しひいおばあちゃんと一緒にひな人形を折ってひいおばあちゃんの部屋に飾りました。夏には夏休みの宿題で私がかいた絵を見せたり、さらにその絵で賞を取ることが出来たら、誇らしげに伝え、褒めてもらったりしました。クリスマスのある十二月には妹達と、サンタの帽子、トナカイのかぶりものをして会いに行きました。それをつけてひいおばあちゃんとお話していると、老人ホームの職員さんが来て、写真を撮ってくれました。次に老人ホームに行った時、その写真が「メリークリスマス！」のコメントと共に、かわいく老人ホームの壁に飾られていて、恥ずかしくも嬉しく思いました。

ひいおばあちゃんとの面会の時間が終わりに近づくと、一緒に来ている祖父は、ひいおばあちゃんの車いすを押しながら老人ホームを一周散歩します。ひいおばあちゃんはいつも笑顔です。そんなひいおばあちゃんの写真を見ると、私も笑顔になります。ひいおばあちゃんは、もしかしら、私に楽しい時間をもらっていると思ってくれているのかもしれない。でも実は、ひいおばあちゃんの笑顔をもっと見るために、次は一緒に何をしようか、と私がひいおばあちゃんに楽しい悩みをもらっているのです。(次は老人ホームの一階にある喫茶店と一緒に入ってみたい。でも、もしかしたらひいおばあちゃんが食べたり飲んだりできるものが無いかもしれないから、私が家族で行った旅行で食べた美味しかったものの写真を見せたりできるように持つていこうかな...) 私の楽しくて、幸せな悩みが、いつまでも続きますように。

優しさから生まれる幸せ

一宮市立北部中学校一年

松原 弘将

僕には毎月、とても楽しみにしている便りがある。夕方学校から帰宅し家のポストを覗き、その封筒が入っているとうれしくて真っ先に封を開ける。それは祖母が入居しているグループホームから届く毎月の便りだ。入居している方々の日常がカラー写真でふんだんに印刷されている。僕はまず、たくさん写真の中から大好きな祖母の写真を探し、見つけた瞬間うれしさと自然と笑みがこぼれてくる。先月は折り紙で紫色の花を作ったり、おやつレクで皆さんと一緒に楽しそうにおやつを食べたりしている祖母の姿が写っていた。

僕の祖母は、僕が小学五年生の時に祖父が亡くなり、祖父の死後しばらくしてアルツハイマー型認知症を発症した。認知症は、その人にとって大切な人や物を失ったショックや悲しみから誘発されることも珍しくはないそうだ。

僕が小さい頃、祖父母の家に行くと、いつもテーブルの上には祖母の手料理が溢れそうほど並んでいた。料理上手な祖母が作った食事を家族みんなで囲んで食べるのが僕は大好きだった。そんな祖母が認知症を発症したことを、初期の段階では僕達家族は誰も気づくことが出来なかった。祖父が亡くなってから一人暮らしとなった祖母は、僕達が遊びに行

くと、いつも変わらずご馳走を作って出迎えてくれていた。本当にいつもと何ら変わらず。

祖母の異変を知らせてくれたのは警察からの一本の電話だった。家の中に不審者が居ると、祖母が電話したからだ。そして警察の方は祖母からの通報は、これまでも何度かあったことも教えてくださった。祖母の病状には初期の頃には波があり、僕達家族と一緒に居るときはいつもの明るくて料理上手な祖母だったが、一人の時間に寂しさを感じると見えない人や物が見え、認知機能の低下が現れていることだった。

その後、認知症を発症した祖母と、祖母を支える僕達家族を助けてくださったのは、地域包括支援センターの方々だった。家族が行けない日は訪問してくださり、父と母には認知症の方が入居するグループホームを紹介してくださった。グループホームでは認知症ケアや生活自立サポートが行われ、その中で毎日のように様々なイベントが開催されていることだった。

祖母が入居して初めて会いに行ったときは、コロナ禍だったため、オンラインでの画面越しの面会だった。直接会うことは出来ないけれど画面の中の祖母は、トランプをしたりお花見に行ったりしたことなどを楽しそうに話してくれた。認知症は脳の刺激が少ないと進行が早まる可能性があることから、ホームで開催されているイベントや活動はとても大切なことだと施設の方が教えてくださった。僕が毎月楽しみにしているホームからの便りには、そのさまざま楽しいイベントの様子が掲載されている。そして今、コロナの規制が緩和され、ホームに行くことと祖母と直接会うことが出来るようになった。画面越しのときと比べると直接会えることはとてもうれしいのだが、いつも決まって辛くなる時がある。認知症の祖母は、僕と弟の顔を見ると毎回必ず同じことを言う。「もうすぐしたらここを出て、そしたらまたご飯いっぱい作るからね。」と。その言葉を聞く度に僕は胸が締め付けられるように苦しくなり涙が出るのを堪えている。祖母の優しい言葉と、僕の好物だった祖母の作ったケ

チャップのかかった熟々のハンバーグの味が思い出されてくる。

「福祉」とは、「すべての人が幸せに生活するためのとりくみ」とある。ホームで過ごしている今の祖母の姿には笑顔が多い。きつと大好きだった祖父が亡くなってから一人で過ごしていた頃よりも、今の祖母は「幸せ」なんだと思う。そんな祖母の幸せには、家族だけではなく、さまざまな方達のサポートがあるからこそだと僕は思う。

祖母の異変を最初に伝えてくださった警察の方々。グループホームを紹介し、支えてくださった支援センターの方々。そして今現在、祖母の生活をサポートしてくださったグループホームの方々。

福祉とは幸せ。そして幸せとは「優しさ」でもあると僕は思う。今の祖母の生活はたくさんの方々のお優しさから生まれてきていると思う。その優しさに感謝の気持ちでいっぱいになる。そして僕も人を幸せに出来る人になりたいと思う。中学生の僕にも今出来ることはたくさんあるはずだ。学校生活の中にもあるだろうし、日常の中でも、例えば電車やバスで席を譲ることだってできる。毎日の生活の中で僕にできる優しさを行動に移していきたい。

一つでも幸せを増やしていけるように。
祖母の幸せそうな笑顔の便りを見て、僕はそう強く思った。



あなたが思う思いやり

扶桑町立扶桑中学校 一年

松田 実桜

私はこの夏休みに、「永遠の郷」という老人ホームで福祉体験をさせてもらいました。職員さんが優しく出迎えてくれて、穏やかな雰囲気をもった素敵な場所でした。ここで体験させてもらったことの二つを紹介したいと思います。一つ目は、車椅子体験です。皆さん、車椅子にも種類があることを知っていますか。車椅子には大きく分けて三種の種類があります。まず、一般的に使われている事の多い、自走用と介助用が一体になったものです。次に、座る体勢が困難な人向けの、背もたれと座面の角度を調節できるものです。さらに、電動のタイプのリモコンで操作するものです。高齢化すると皮膚が薄くなり、車椅子を降りる際に、車椅子のフットサポートに脚が当たって皮膚がただれることがあるそうで、職員さんはそのようなことに気をつけて介助していました。最近では、車椅子を利用して人の介助で、「勝手に車椅子を押さない」ということがマナーとして知られています。実際に乗って、いきなり押しってもらうのと、「今から移動しますよ。ゆっくり進みますね。」と一言声をかけて押しってもらうのでは、声をかけてもらったほうが安心できます。これらは、押す人と乗る人の信頼関係なんだと思います。二つ目は、入居者さんとのコミュニケーションをとったことです。今回初めて会った方々で最初は緊張したけれど、話しかけてみると、あるおばあさんは昔農業をやっていたにんじんやトマトなどを栽培していたというのを懐かしそうに語ってくれました。その時のおばあさんの、目を細めてほほえ

でいたあの顔は忘れられません。また、入居者が作った、手縫いのキーホルダーをもらって温かみを感じました。

「永遠の郷」は、入居者の方の第二の家を目指して、その方の自宅のような環境づくりをしています。例えば、入居者の方の愛用のもの、写真、たんす、カーテン、枕カバーとブランケットなどを個室に置いて自分流にアレンジできるようにしていることです。職員さんに、「入居者の方ははじめ全く知らない方なのに、なぜ人のために働けるのですか。その原動力を教えてくださいませんか。」と質問しました。それで、職員さんは、「よりよく生きぬいてもらいたいから、それを全力でサポートしたいという気持ちがあります。入居者の方がこの施設で過ごさせて幸せだったと言ってもらえることが励みになります。」と答えてくださいました。そして、車椅子などのように自分では気付けないことがあるからこそ、人の立場に立って、自分だったら脚に当たって痛いと言えなければ、高齢者の方は痛いと言いつらいかもしれないと想像したり、考えたりして行動することが必要だということも知りました。

私はバレーボール部に所属しています。顧問の先生はよく、「ボール拾いができるチームこそ強い。」と話しています。ボール拾いができるチームはチーム力が高いということです。バレーボールでは、足元にボールが転がっていると、その近くにいた子がボールにつまずいて怪我をしてしまうということが起きかねないのです。そうしないためには、一人一人が自分のことばかりではなく、周りにも目を向けて、すぐに拾いに行ったり、練習を始める前に使わないボールはしまったりするなど、ちょっとした気遣いができるようになることが一番の近道だと思いました。

皆さんは、思いやりといえど何をうかべますか。福祉だけが思いやりでしょうか。私は「思う」と「思いやり」は別物だと考えます。「思う」は自己満足で終わらせることです。「思いやり」は相手の気持ちを考慮した上で行動に起こすことです。自分が受けた幸せを他の誰かに渡すことで幸せな人が増えるという、ペイフォワードの考え方が広がっていく

といいと思います。

「永遠の郷」を訪問させてもらって、素敵な空間だなと思いました。なぜなら、入居された方を、精一杯サポートして、笑顔にしている様子に心に残ったからです。将来、介護や医療関係の仕事に就くかは分からなければ、この経験を糧に、人を思いやって人のために働ける人間になりたいです。そして、この世の中が、いつか笑顔であふれることを願っています。



思いやりの架け橋

岡崎市立北中学校二年

新井 こま璃

〔Hello〕

オーストラリア旅行初日、私たちに初めて話しかけてきたのは、一匹の犬を連れた車イスに乗ったおじいさんだった。

待ちに待った夏休み、私は母と二人で行く初めての海外旅行をずっと楽しみにしていた。初めて見るたくさん外国人、初めて見る広大な景色、初めての日本語があまり通じない環境、全ての「初めて」に私はワクワクしていた。

おじいさんは私たちに向かって何かを伝えようとしているが、本場の英語は早口で聞き取る事が難しい。私は勝手に、車イスに乗っているのだから体が不自由で、私たちに助けを求めていると思い込んだ。どうしてほしいのだろうと困っている私たちを見て、おじいさんはゆっくりわかりやすい英語でこう話してくれた。

「僕の犬とてもかわいいでしょ。触ってごらんよ。」

想像とは全く違うその言葉に、私はとても驚いたと同時に、なんだかとても嬉しい気持ちとはずかしい気持ちになった。車イスに乗っているというだけで、体が不自由だと決めつけてしまった。実際のおじいさんはニコニコととても幸せそうな顔をしていた。お互いがお互いの言葉を完璧に理解できたのかはわからないが、相手のことを理解しようとする気持ちが大切で、お互い思いやりを持って接する事で通じ合えるということを知った気がした。

私の祖母は持病があり、昔からよく咳をする。二〇一九年、世界中で猛威を振るった新型コロナウイルスの影響でマスク生活が当たり前となったことから、祖母の咳に対する周りからの目は次第に冷たくなっていった。出かけることが大好きな祖母は、たくさんのお稽い事もしており、通っているヨガ教室のイベントに私を招待してくれた。

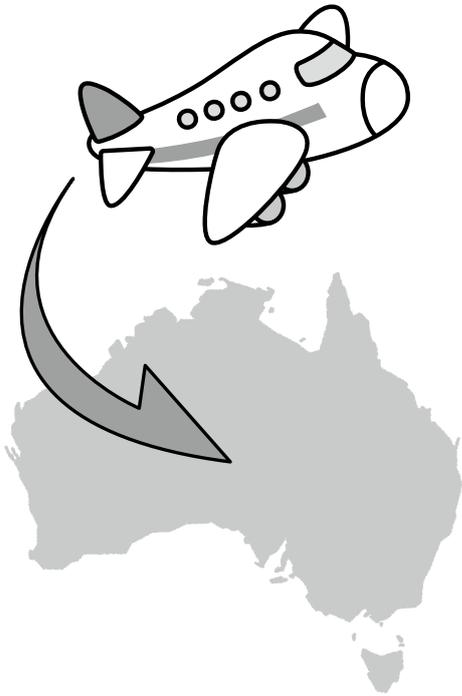
先日、二人でイベントに参加した時のこと祖母はヨガの最中でも周りの人の迷惑にならないよう、必ずマスクをするが、やはり少し咳込んでしまった。すると隣の人が迷惑そうにこちらをにらむような顔をして、「もうっ。」とつぶやきながら自身のマスクを付けはじめた。新型コロナウイルスの流行以降、周りの人が他人の咳に敏感になってしまふこともよくわかるが、祖母も祖母なりに少しでも症状が改善されるようにと始めたヨガだったこともあり、私は相手に申し訳ないという気持ちと、そんな態度に出さなくても、という二つの気持ちで悲しくなった。どちらが悪いとも言えない状況だが、祖母はいつも自分なりに最善を尽くして、咳をなるべく我慢したり、席を外して人のいない場所へと移動したり、と常に周囲に気を配りながら生活をしている。祖母の咳に対する周りの決めつけは、私のおじいさんに対する決めつけと同じ事ではないかと思っただ。理解してもらふことは難しいと思うが、もし私が同じ状況に置かれたら、まずは相手の気持ちを考えて、相手に寄り添った声かけをしたいと思う。

おじいさんの事、祖母の事を考えていたら、以前読んだ新聞の投稿を思い出した。障害がある息子を持つ母親の記事だった。

母親はその息子を毎日教室まで送り届けるのが日課だ。しかし、大声を出してしまう息子の後ろを歩きながら、すれ違う生徒に頭を下げ続けることも日課となってしまった。これは少なからず偏見を持った生徒がいたからこの様な行動に出たと推測できる。この記事を読んで、祖母の時と同じで誰も悪くないが悲しい思いをしている人が世の中にはたくさんいるのだろうと胸が痛くなった。

一人一人に出来る事はとても小さな事だが、その一人一人が相手の立場に立って常に思いやる事で、相手の心はとても軽くなるはずだ。だが、当事者も人に頼ってばかりでは、解決できないこともたくさん出てくるだろう。

おじいさんは、車イスに乗っていて、自分で行動できる範囲は限られると思われるが、SNSにたくさんの投稿をして、世界中の人たちと交流を深めていると話してくれた。その日も既に私たちと交流をして、また新たな人とのつながりを増やした。何て素晴らしいのだろうと感動した。おじいさんがなぜ車イスに乗ることになったのかはわからないが、落ち込んだり困ったりすることも今までにたくさんあったはずだ。しかし、自分からポジティブに声かけをして楽しんでる姿を目の当たりにして、楽しかっただけではなく、言葉では言い表せない、目に見えない大きな物を得られた素晴らしい海外旅行となった。これからはずっと私を大切にしてくれる祖母の側で、今度は私が祖母の力になって、色々な人に声かけをして守っていききたいと思った。



敬う心を

一宮市立丹陽中学校二年

杉山 舞音花

私は、以前から福祉活動に興味があり、夏休みにある福祉活動に応募しました。

活動当日、私は少し緊張していましたが、施設の職員の人たちは、優しく迎えてくださり、私に丁寧介護についての説明などをしてくださいました。

施設にいる人は、高齢者で、認知症を患っていたり、足が悪くて歩けなかったりする人など、さまざまな病気を患っている人が、この施設に通っているということを教えてくださいました。

次にお話をされたことが、私の中でとても印象に残りました。それは、「認知症の方は、何回も同じことを言ったり、変なことを話し出したりすることがあります。でもそのときに『この話、一回目ですよ。』などと、おかしなところを指摘するようなことを言わないようにしてくださいね。」

というお話です。職員の方によると、「間違いを指摘された認知症の人は、ショックを受けてしまうので、例え同じ話や変な話をしていても、それをしっかりと聞いてあげることが大切ですよ。」

と、間違いを指摘することが正しい接し方とは限らず、心遣いが大切とのことでした。そのとき私の頭の中にハッとあることがよみがえりました。私の亡くなったおじいちゃんのことを思い出したのです。

私が小学四年生のある日、私のおじいちゃんはお風呂で倒れ、検査をすると、脳梗塞だとわかりました。以来、おじいちゃんは変わってしまいました。それまでは、児童養護施設の先生をしていて、いつも頭の中は養護施設の子供たちのことを考えていました。算数も得意で、私にたくさんの問題集を作ってくれて教えるなど、いつも太陽のように明るく元気いっぱい、優しいおじいちゃんでした。でも、倒れてからというもの、足が動かなくなっていく、どんどん話すことがあやふやになっていきました。ときには、自分の年齢を二十歳や九十歳など、本当の年齢と違うことを言い出すことがあって、私はその度に、「違うよ」と言い、本当の年齢を教えていました。

でも、そのときのおじいちゃんは、何とも言えない表情をしていたのを覚えています。

私の何気ない一言や、私の一方的な想いで、おじいちゃんを傷つけていたのではないかと、ハッと、そのことがよみがえったのです。

もう一度、自分の立場に置き換えて、職員さんが言った言葉を心の中で呼び起こしました。

「同じ話や変な話をしていたとしても、それをしっかりと聞くことが大切です。」

「おかしいところを指摘するようなことを言っただけじゃないですよ。」

心の中で響くこの言葉。そうか私は、おじいちゃんの気持ちも考えず、相手の立場になっていなかったのだと、改めて気づかされたのでした。

本当の年齢を言えば思い出してくれるだろう。おじいちゃんはいつか必ず元のように戻ってくれるだろうと。

でもそれは、ただ私の一方的な願望だったので。そのときのおじいちゃんの病気の状態から目を背けていて、本当の意味で認めていなかったのではないか。認めることが怖かったのではないかと今になって思います。

相手の状態をしっかりと受け入れて、そして相手に合わせていくこと。

これこそが、相手を思い、相手を尊重する気持ちなんだと思ったのです。そんなおじいちゃんは、小学五年生の夏に、天国に行きました。おじいちゃんにしてあげられなかったことや、あのとき、こんな言葉をかけてあげられていたら……。と、そんなことを考えていたら、後悔の想いがぐつと込み上げてきました。

でも、この後悔する気持ちがあるからこそ、今回の福祉活動で出会った職員さんの言葉や、接し方を重く受け止めることができたように思います。

福祉活動や私のおじいちゃんとの経験を通して思うことは、相手の状態を知ることの大切さと、そして一方的な想いではなく、相手の気持ちに寄り添う心の重要さです。

人はいつまでも健康ではられません。会話も思うようにできなくなったり、体も思うように動かせなくなったり、私たちはいずれ、一人で生きていくことが困難になります。人は、人の支えの中で生きていくということを、福祉活動を通して、改めて思い知らされました。私は今後、相手の気持ちに寄り添っているかどうか、相手を尊重しているかどうか、温かく人に手を差し伸べていける人になれるよう、向き合い続けていきたいと思えます。



私の気付き

知多市立旭南中学校二年

鈴木理世

「日本は障がい者に対する不満が少ない国です。」とある車椅子利用者の方の言葉。そうなんだ、日本はいい国なのだと思っただけで、私はとても恥ずかしくなりました。そして無知な自分を思い知らされた気がしました。なぜならその方の言葉には続きがあったからです。

「だってみんな無関心だから。」

クラウドファンディングを募り、この夏に障がい福祉の新事業を常滑で始めた方のお話の中で印象に残った言葉でした。

私自身、「福祉」について日常生活で考えることなどほとんどありませんでした。何だか難しそうで特別な何かというイメージでしたが、皆が「幸せ」に暮らすことが福祉の意味だと知り、意外な気持ちになりました。そして福祉の言葉の中には、その幸せのために「協力し合う」という意味もあり、公的支援やサービス、ボランティア活動なども含まれるのです。福祉と一言に言っても、その範囲や分野は多岐に渡り、地域における活動であったり、高齢者の方や子どものため、また災害や国際社会への支援であったりと、私のすぐ隣で福祉活動は行われ続けてきたのです。

その中でも私が興味をもったのは「子どもの福祉」です。調べてみると日本の社会福祉法制の中でも最初に制定されたのが「児童福祉法」（昭和22年）でした。その頃と今では子どもと子育てをめぐる社会環境は大きく変化し、課題は一層広がり、複雑化しているそうです。

子どもの福祉を推進するためには、まず子どもを中心に考え、「子育て家庭」を社会全体で支えていくための社会参加や地域づくりが重要であり、地域住民やさまざまな人が協働することが求められています。いま地域で広がっている「子ども食堂」や「子育てサロン」などの活動が「協働」を促進する役割として期待されています。

私はこの夏休みに子育てサロンのボランティアに参加しました。知多市で十年以上前からある「親子ひろば」に、ボランティアとして参加するのは二度目でした。ここでは玩具の消毒をし、実際に赤ちゃんや未就園の子どもたちと一緒に遊びました。私は職員として長く携わっている方に「子育て」や「親子」を取り巻く環境の変化や課題について質問をしてみました。日本の社会経済に大きな影響を及ぼすと言われている少子化問題の深刻さをここでも感じているようです。核家族化が進み、近所に同世代の子がおらず、子ども同士で遊ぶ機会が少ない。それは親の孤立も意味します。閉鎖的な家庭の中で生まれる痛ましい事故や事件をテレビのニュースで多く目にします。その職員の方は、広がる格差社会の中で共働きが増えていることや、スマートフォンなどで情報が溢れていることを変化として感じているそうです。

そんな状況の中でこのような「親子ひろば」が、親子同士のつながりを作り、実際の触れ合いの中でさまざまなことを教えてくれます。それは親の不安や負担も和らげる役割となっているのかもしれないと感じました。帰っていく親子の笑顔が一つでも増えることを願うばかりです。

また、この夏はもう一か所、ボランティアに参加しました。認可外の保育園で園長先生の許可を頂き保育士さんの手伝いをさせてもらいました。子どもに関わる仕事に興味はありましたが、実際に体験することで、その大変さに驚きました。子どもの命と安全を守るために国から決められたルールに従いながら、子どもたちの主体性を大事にして活動を行わなければなりません。一番驚いたのは赤ちゃんのお昼寝を五分ごとにチェックしていたことでした。保育園での事故も話題になっていますが、

現場で働く保育士さんたちは皆一生懸命に子どもたちの成長を支えているのだと実感しました。

言葉にすると難しいことのように聞こえるけれど、誰かが転んでしまったり手を差し伸べて起こしてあげる。泣いている子がいたら「どうしたの」と声をかけてあげる。困っている人がいたら助けてあげたいと思うその気持ち「福祉」の始まりだと思えます。この夏の体験で、身近な福祉について知ることができ、私も誰かに支えられて生きているのかもしれないと考えるきっかけになった気がしました。

来年の自分はどんなことに気付き、どんなことを考えているのだろうか。無関心では何かに気付くことも考えることもできない。



人は人と生きている

尾張旭市立東中学校二年

中村 夏美佳

私は小学四年生の二月に母子家庭になりました。そして、小学五年生の九月に「コントレイル子ども食堂」を初めて利用しました。そのときはまだ新型コロナウイルスが流行していたので、テイクアウトしか受け付けていませんでした。家に帰った後、母とコロナが収束したら「コントレイル子ども食堂のボランティアに参加したいね。」と話しました。このことがきっかけで、子ども食堂でのボランティア活動から多くの学びを得ることができました。だんだんと収束し始めた十一月、初めてコントレイル子ども食堂のボランティア活動に参加しました。

そもそも子ども食堂とはなんでしょうか。それは、貧困家庭や孤食の子どもに対して、ボランティアや自治体が主体となり、子どもが一人で利用できる、無料、または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供する場のことです。また、子ども食堂には大人や地域の人々なども来ます。そして、コントレイル子ども食堂では誰でも利用でき、笑顔で気軽に食事をしてほしいという思いから無料で提供しています。

このボランティア活動で学んだことの一つ目は、世の中にはまだ私が知らない環境で生きている人がたくさんいることです。ボランティアの中には、小さなお子さんを持つているお母さん、料理の手際がいいおばあさん、このボランティアがきっかけで将来の夢を見つけた高校生、学校に行くことができない不登校の子。ボランティアの中だけでも多様な人がいることが分かりました。それなら、世界にはもっと出会ったこと

がないような人たちがいることを再認識させられました。さらに、どんな人ともうまく関わっていかなければならぬことも学びました。なぜなら、ボランティア活動での料理を作るときは大量の食材を切ったり、きれいに盛り付けなければならぬので、仲間と分担して、連携しながら作ります。もちろん気が合わないなど思う人もいました。でも、一つのことを成し遂げるためには、人と協力し合い、助け合いながら進めていく必要があると思います。

二つ目は、自分の頭で考えて行動することです。子ども食堂は限られた時間の中で作るのです、一つ一つ質問をしてから作る時間なんてありません。唯一、質問するのは味付けのチェックのときぐらいです。自分の頭で考え、行動することによって、考える力、周りを冷静に見る力、考えを行動に移せる力などが身に付いたと思います。これらの力によって、困った人がいたら自主的に声をかけることができるようになり、自分から周りの人を助けようと思えるようになりました。特に、考えを行動に移せる力は私にとって、大きな力となっています。例えば、自分の意見をはっきりと言えるようになったことが挙げられます。いままではすべて肯定していましたが、このボランティア活動をするようになってからは、言いたいことははっきりと言えるようになりました。ボランティアをすることにより、自己成長することにもつながっていくのだと身をもって実感しました。

三つ目は、ボランティアの人から聞いた「ノーマライゼーション」についてです。まず、「ノーマライゼーション」とは、8つの原理の考え方でできています。一日の普通のリズム、1週間の普通のリズム、一年の普通のリズム、あたりまえの成長の過程、自由とその尊重、男女がいる世界に住む、平均的経済水準の保証、普通の地域の普通の家に住むことです。これらのことは誰でも保障されるべきこととされています。つまり、世の中の人々はすべて平等であり、幸せになる権利があるといえます。だから、みんなが一人一人自分らしく、自由に生きることが大切だ

と感じました。ボランティア活動で新しい人と関わることで自分の視野も広がっていききました。

ボランティア活動には小さなことから大きなことまで色々なことがあります。でも、ボランティア活動からは大小関係なく、得られるものが数え切れないほどあります。私が母子家庭になったからこそ体験できることがあります。これから高校、大学、社会人と大きな試験が立ち上がると思います。その時には、ボランティア活動で学んだことが絶対に活きると思います。そして、人と人は支え合い、傷つけ合いながら生きていくと思います。だから、私はどんな人とも関わって生きていきます。そのほうがより人生が豊かになるからです。そうやって、少しずつ経験を積み重ねていくことで私の未来はもっと良いものになっていき、周りに優しさがあふれる社会になればいいなと願っています。



普通は存在しない

豊橋市立吉田方中学校三年

鈴木 美柚莉

みなさんは普通という言葉を目にすることはありませんか。私は普通という言葉があまり好きではありません。なぜならこの世の中に普通は存在しないと思っているし、普通という基準はないからです。

ですが「普通の子」「普通じゃない子」という言葉がこの世の中にはあるのが現実です。身近でもインターネットを通してでも私は耳にした事があります。この普通とはきつと健康な子と、体に障害や不自由がある人との区別で、それを「普通」「普通じゃない」という言葉で勝手にまとめられてしまっていると感じました。普通、普通じゃないという言葉の解釈はまちがっていると思います。

私がまちがっていると思ったきっかけは小学生に入った頃のことです。小学生に上がると保育園時代にはなかった特別支援学級というクラスができました。私はそこで初めて、同い年の仲間が障害だったことを知りました。だからこれまであたりまえに過ごしていても感じず同じ人間として楽しく毎日生活を過ごしていました。他の仲間もいっしょです。ですが小学校に上がり障害だと知ったとたん皆は、少しその子を避けたり、からかったり、前までは普通に接していたのに、障害というだけで皆の空気感や対応、行動が変わっていきました。その子は前と同じように皆に接してくれて、いつもニコニコしていて笑顔で話しかけてくれるのになぜ障害ということを知っただけで自分とは違う普通じゃない子という対応をその子が受けなければならぬのか分かりません。

これまで目の不自由な方、耳が聞こえない方、足が不自由な方など沢山の方と関わった事があります。目の不自由な方は、耳で状況を感じ取ったり、点字で文字を読みとったり、今の風景を想像したり、私たちには感じられない事を感じられたり、私たちより耳が敏感だったり、目で感じられないものを体や肌で感じとったりできるのかもしれない。耳が不自由な方は、目でその場の状況を感じたり、目で見ると分かるその場の雰囲気だったり、人とのコミュニケーションを取るために、人の行動や仕草、表情をよく見ていたり手話を使って会話したり、肌で音を感じて楽しんだり、私たちには見えない世界や、耳が聞こえないからこそ私たちがより人の事をよく見て感情を読んだりするかもしれない。足が不自由な方は、車いすのスポーツを楽しんだり、上半身で動くことが多いから上半身を器用に使ったり、車いすに乗りながらできる事を考えたりする判断能力が高かったり、車いすに乗っていないと見えない風景や世界があったり、私たちには見えないものが感じられるのかもしれない。

このように今まで私が出会ってきた人はその人なりの生き方をしている私には感じられないものがあるのかなと考えました。たしかに、体に不自由な事がある方は自分と感ずるものが違うかもしれませんが、それは人間だから誰一人と、同じ人はいないと思うし、一人一人の大切な個性だと思います。目が見えないから、耳が聞こえないから、足が動かないからではなく、それはその人にしか感じられないすてきな個性を持つていて、自分とは違うではなく新しい考え方を持っている方だと思っています。

障害者だから普通じゃないではないという事ではなく、みんな同じ人間で、人それぞれの特徴や、感情、考え方、個性さまざまなものがあります。だから普通、普通じゃないという言葉は存在しません。

この世界が一人一人としっかり向き合っただけで判断せずその人を知ろうとする思いを持つことで今まで見えていなかった世界や新し

い考え方を見つけることが出来るかもしれません。お互いを認め合い、理解し合って世界の人々全員がより自分を大切に生きていけるといいなと思います。



年をとっても安心して暮らせる社会に

清須市立清洲中学校三年

加藤 穂夏

去年の夏、私は職場体験で特別養護老人ホームに行かせてもらいました。その施設では足腰が弱くて歩けず、車椅子で生活されている方や、一人でご飯が食べられない方、認知症の重い方など家で生活することが難しい方がいらっしやいました。スタッフの方から「たくさん話しかけて下さいね。」と言われましたが、私は正直何を話せばいいのか戸惑いました。

私の両親はデイサービスを経営しています。そのため、若い頃から施設を利用していらっしゃる方とお話ししたり、一緒に体操したりしていたので、お年寄りの方とお話するのは得意で、どのように接すればいいのか分かっていたつもりでした。しかし、特別養護老人ホームの利用者さんは、私に興味を示して話しかけて下さる方はおらず、テレビを見ているだけか、ポーツとして過ごしているだけで、私を知るお年寄りの方とは全く違っていました。最初は、話しかけられてお節介に思われなにか不安でしたが、実際に話をしてみると、会話が通じないような方でも笑顔で応えて下さったり、一生懸命うなずきながら聞いて下さったり、嬉しそうなお様子が見られて私も嬉しくなりました。

スタッフの方の仕事を拝見すると、とても忙しそうで、テーブルに座っている利用者さんと雑談するための時間は確保されていませんでした。利用者さんはただご飯を食べさせてもらい、お風呂に入れてもらい、トイレに行かせてもらうという日常を過ごすだけの生活でした。その中で

私達のような職場体験の中学生が来てお話しする事は少しでも新鮮に感じられたのではないかと思います。最終日には、職場体験に行った私を含めた三人で「ふるさと」の曲をリコーダーで演奏しました。利用者さんの中には一緒に歌って下さる方や、ニコニコして手を叩いて下さる方もいて、最後は皆さん拍手をして下さいました。私は利用者さんが笑顔になってくれた事が嬉しく、介護の仕事のやりがいや楽しさを少し理解できた気がしました。

特別養護老人ホームの利用者さんは、自宅で生活できない方ばかりで、このような施設がないと、家族は困ってしまうと思います。高齢のご夫婦だと、奥さんが旦那さんのお世話をするのが大変で奥さんも体調を崩してしまったり、子供がいても仕事があつて日常のお世話ができなかつたりする可能性もあります。施設の仕事は大変ですが、社会にとって絶対に必要な仕事だと思いました。

しかし、最近介護職の人材不足の話をよく耳にします。大変で責任のある仕事なのにお給料が少なくお休みも取りにくいのが不人気の理由です。介護職の方のお給料が増えて、やりがいを感じて働けるような職業になるといいなと思います。また、母から聞きましたが、年を取ってもできるだけ長く自宅で生活ができるように、高齢者の健康寿命を延ばすことも大事だそうです。普段から運動したり家事をしたり、仕事を続けることも良いことだそうです。「社会で役に立つ」、「家庭で役割がある」ことが、年をとっても元気でいられる秘訣だよと教わりました。今までそういうことは意識したことがありませんでしたが、老人ホームでの職場体験をきっかけとして、健康寿命を延ばす重要性を理解しました。

私の両親が経営しているデイサービスは、リハビリ専門の施設で、自宅で生活している高齢者の方が今よりも元気になるように、もしくは、体力が維持できるように通われているそうです。また、自宅に閉じこもりがちな高齢者の方が定期的に同世代の方やスタッフと交流することで、認知症予防にもなっていると聞きます。このようなデイサービスが充実

すると本人も家族も安心だと思います。

これから高齢化社会がますます進みますが、年をとっても安心して生活できるように、介護施設の充実と、自宅で元気に生活できるようにする仕組みとの両方が大切だと思います。

特別養護老人ホームの職場体験では、自宅では生活できない方が入所する施設での介護についてを学びましたが、それと同時にこのような施設のお世話にならないようにするにはどうすればいいかを考えさせられました。

私も、私の両親もいづれ年をとります。健康寿命を意識して過ごしていきたいです。また、介護が必要になった場合には、安心して生活できるように社会になってほしいです。



いつかまた、階段で

学校法人さくら学園
安城生活福祉高等専修学校一年
松岡 愛弓

中学生の頃、他の同級生たちが将来の夢として医者や教師を挙げる中、私は介護福祉士や葬儀屋になりたいと考えていました。同級生たちは驚きや違和感を示し、「変わっている」と私に言ってくることも多かったです。しかし、私にとってそれが当たり前のことでした。私は人々が支え合い、助け合う姿に魅力を感じていました。私自身が誰かの役に立ち、心の支えとなることが何よりも大切だと思っていたからです。

高校生になり、福祉葬という言葉に出会いました。福祉葬とは、貧困や孤独死などの状況にある方々に対し、無料もしくは低料金で葬儀を行う制度のことです。その時は、なぜそのような制度が必要なのかと疑問に思いました。しかし、現実を知るにつれ、この制度が必要であることを理解するようになりました。

きっかけとなったのは、私が住んでいる団地のある出来事でした。その出来事は小学生の頃に遡ります。ある日、団地内で老夫が亡くなったという知らせが入りました。私はその知らせを聞いて初めて号泣しました。なぜなら、その老夫は私とよくお話する仲だったからです。老夫はひとり暮らしで、周囲からはあまり顔を知られていない人でした。そして当時の私は友達と関わるのが苦手で、地域の方々との交流もせず、独りでした。老夫と私が初めて出会った場所は、団地の階段です。重た

いランドセルを背負い、少し先に見える階段に向かって歩いていくとき、階段を慎重に降りてくる老夫がいました。私は日頃から学校で「高齢者の方には親切にすること、そして困っているなら助けてあげること、この二つのことを意識してください。」と言われていたことを思い出しました。地域の方々と交流などしたことのない私ですが、「挑戦は大事だ」と自分を勇気づけ、老夫にかけ寄り手伝おうとした瞬間、「手助けなどいらん。さっさと家に帰れ。」そう言われてしまいました。そして老夫は私を視界から消し、また慎重に一歩ずつ階段を降りはじめました。私は正直「面白い」と思いました。なぜ面白いと思ったかは今でも分かりませんが、当時の私は老夫が私と会話をしてくれたことが嬉しかったのだと思います。それから私は毎日階段を慎重に降りている老夫に声をかけ続けるようになっていきました。ただ一つ違うのは、老夫が本当に手助けをしてほしいと言ったとき以外は見守ることにしたことです。誰だっ

て自分が頑張っているときに外から必要のない手助けがきたら、まるで自分ではできないと言われているように感じてしまうと思ったからです。声をかけ続けるようになってから老夫もだんだん私に声をかけてくれるようになり、たくさんのお話を私に聞かせてくれました。私にとって大切な友達のような存在だった老夫との別れはあまりにも突然でした。いつも通り老夫に会いに行こうと家で支度をしているときに来た急な知らせでした。老夫は、お金や身寄りがなく、一人で亡くなったことを後に母から伝えられました。私は、亡くなった後も、老夫のことに誰も気づくことなく、そのまま放置されていたのだと考えるととても苦しく、悲しい気持ちになりました。

私は、老夫との出会いをきっかけに介護福祉士、葬儀屋という将来の夢を持つことができました。介護福祉士として、高齢者の方や障がい者の方の心と身体のケアを通じて人々の笑顔を支え、葬儀屋として故人本人の想いとご遺族の想い、両方を最後までサポートしたいと考えています。私は今、介護福祉士を目指すために勉強しています。そして同時に、

葬儀屋としても働きたいと思っています。人々の最期の瞬間に寄り添うこと、生と死、喜びと悲しみを共にすること。そんな大切な瞬間に立ち会えることが、私の使命なのかもしれないと、老夫との出会いと別れを通して、痛感しました。そして老夫との思い出のおかげで福祉葬という制度が必要であることを理解することができました。人々が生きる中で、どうしても様々な事情によって困難が生じることがあります。そのような時、誰もが人間らしく、尊厳を持って最期を迎える権利を持つべきだと私は考えます。福祉葬は、誰もが平等に受けられる制度であるべきだと思います。そのためには、社会全体がその重要性を認識し、支え合うことが重要だと感じます。自分自身もその一員として、社会に貢献できるように努めていきたいです。



おじさんと私

愛知県立桃陵高等学校二年

横井 聖奈

私は自分から人に話しかけたり、何か行動を起こしたりする事が苦手でした。しかし高校に入学し様々な学びを得たこともあり、以前よりも成長できたと思える体験をしました。

とある日私は両親と飲食店へ行きました。その店は食べ終わった食器を自ら返却口へ返す方式のお店でした。昼時を過ぎた時間だったため返却口は食器で溢れかえり、四段ほどある中の下段は食器を重ねて置いてあるほどでした。上段には少しばかり食器を置けるスペースが残っていました。両親と食べ終わった時置けるスペースあるかななどと話していました。店には私たちを含め四組ほどの客がおりその中に一人車いすの男性がいました。付き添いの人はおらず一人で来ているようでした。店内は通路が狭く車いすの方が私たちの後ろを通る際に「すみません」と言ったのが最初にかわした言葉でした。食事が終わる頃、先程よりも返却口はうまっていました。

私達が食事を終え食器を片付けたり、机を拭いたり各々帰る支度をしている時でした。どうやら例の車いすの男性も食事を終えたようでした。男性が返却口へ近づいていった際にふと返却口を見ると上の方にほんの少し食器を置けるスペースを見つけました。しかしどうやら車いすの高さからだとその位置に届かず、見えるかどうかも怪しい状況でした。そこで私は少し迷うもその男性に自ら話しかけてみました。時間としてはほんの数秒のことだったのでしようが私自身の体感時間はとても長いも

のでした。その時の私の心の中には様々な想いがありました。話しかけて手を貸したほうがいいのではないか。しかし、急に話しかけたら驚ろかせてしまったり、不快感を与えてしまうのではないか。車いすに乗っているからといって何にでも手を出される事を嫌と思う人もいると聞いた。自分でできると断られてしまうかもしれない。迷惑に思うかもしれない。でもどこまで物を持ち上げることができるか分からないし、車いすに乗った状態で無理に上に物を持ち上げようとするとバランスを崩し転倒しかねない。そうなれば怪我をする恐れがある。それに車いすに乗った高さからでは空きがあることに気がついていないかもしれない。やはり声を掛けた方がいいだろう。などと私の心の中では迷いや決意など様々な想いが交錯していました。私の出した結論は先程も述べた通り声を掛けるとなりました。結論に至るまでの数秒はとてもゆっくりと時間が進んでいったように感じました。

「かわりに置きましょうか。」

と、私は声を掛けました。そうすると男性は「ありがとう。」

と、おっしゃっていた気がします。曖昧な書き方をしたのは、このあたりは緊張ではっきりと覚えていないからです。声を掛け男性から食器を受け取り返却するまでの流れはさほど時間のかかるものではありませんでした。しかし当時の私にとってはとても長い時でした。無事食器を置くことが出来、男性は去っていきました。

どうやら母はこの一部始終を見ていたようで褒めてくれました。嬉しさで恥ずかしさでこそばゆくなりました。緊張や妙な恥ずかしさから男性が去った後も私の心臓は自分でもうるさいと思うくらい鳴り響いていました。このちよっとした行動も人見知りです話しかけたり行動を起こす事が苦手な私には大きな出来事でした。たったの一言を発するだけでも私の声は微かに震えていました。

私はこの一連の流れで終始男性の顔をまともに見れませんでした。し

かし、食器を受け取る際わずかに見えたその顔は微笑んでいたように見えました。鮮明な記憶ではないですが緊張だけでなく嬉しさも感じました。

今思うと、もっとうとうとした方が良かったのではないかと少し後悔をすることもあります。もっと目線を合わせ、相手の目を見て、歩み寄る姿勢を示せていたら。もっと愛想よく自然に振る舞っていたらと。

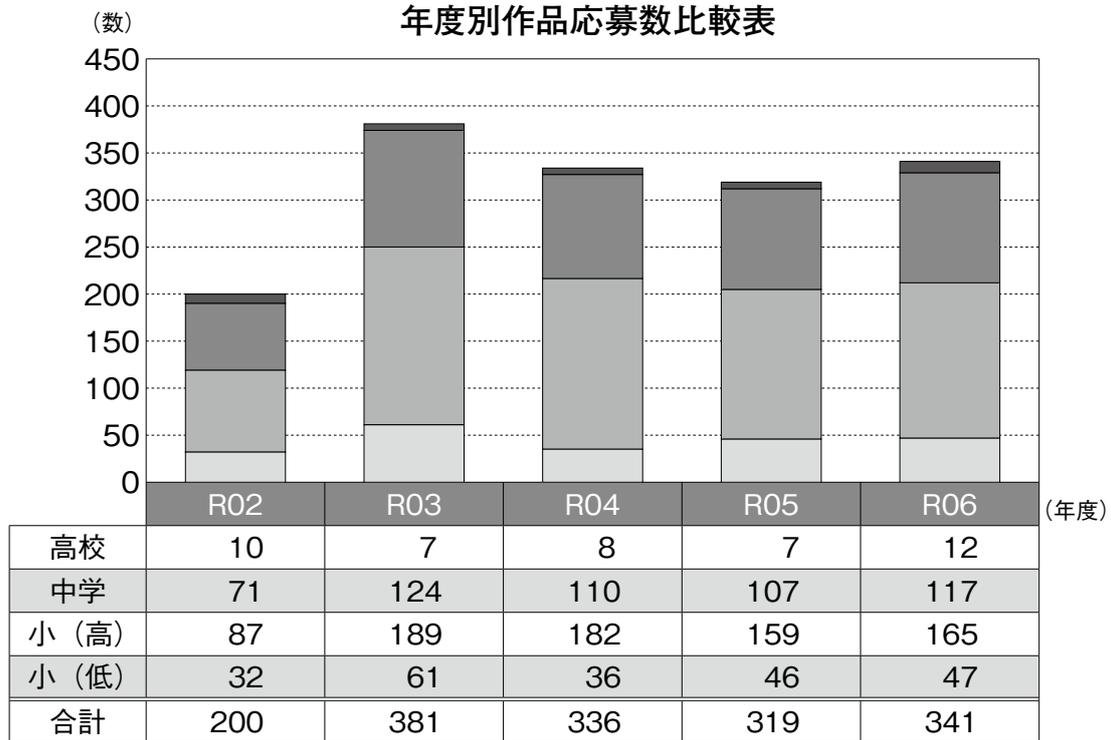
しかし後悔ばかりではありません。この出来事は私にとって大きな成長でした。今までなら見て見ぬふりをしていたかもしれない。高校に入学し障害を持ちながら生活する大変さや、車いすの高さから見る世界。これらを知ってきたからこそ手を差し伸べることが出来たのだと思います。一步を踏み出した事を嬉しく思いました。

もしかしたらあの男性は何かしらの対処法を考え一人でどうにかできたかもしれません。しかし誰かから手を差し伸べられ、助けられることにより得られる喜びや嬉しさなどもあると思います。これに限らずまた少しずつ成長し、後悔を活かせるよう過ごしていきたいと思う出来事でした。



■ 福祉体験作文コンクール ■

《応募状況》 応募総数 341編



福祉体験作文コンクール選考委員

(敬称略)

《審査経過》
福祉体験作文コンクール選考委員会を次の方々により依頼し、募集要項に基づき厳正なる審査をし、部門毎に優秀作品を決定しました。

船尾 日出志 愛知教育大学名誉教授
 杉山 雄一 愛知県教育委員会義務教育課指導主事
 岡崎 千賀子 愛知県教育委員会あいちの学び推進課
 三好 宏和 AJU自立の家わたちコンピューターハウス
 ユニバーサルサービス事業部
 江口 康彦 愛知県身体障害者福祉団体連合会常務理事兼事務局長
 櫻井 悟 美浜町社会福祉協議会事務局長
 飯尾 成生 愛知県社会福祉協議会地域福祉部長

令和六年度 福祉体験作文コンクール募集要項

一、趣旨

児童・生徒が、学校内外で体験する福祉活動やボランティア活動は自己の幅を広げるための豊かな経験となるものであり、ともに生きる福祉の心を育ててくれるものです。

こうした経験を通して感じたことや考えたことを、素直な気持ちで作文に表現したものが心に残り、日常生活の中で広がっていくことを期待して、福祉体験作文を募集します。

二、主催

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

三、応募対象

趣旨に賛同する愛知県内（名古屋市を除く）の小・中・高等学校及び特別支援学校の児童・生徒

四、応募作品の内容

学校での福祉実践教室やボランティア活動等の体験、地域や家庭、身近などでの体験について、自分の考えや感じたことを表現したものとします。

五、部門

- (一) 小学校低学年の部（一～三年生）
- (二) 小学校高学年の部（四～六年生）
- (三) 中学校の部
- (四) 高等学校の部

六、作品規定

(一) 四〇〇字詰め原稿用紙（タテ書）を使用し、各部門の枚数制限は次のとおりとします。

- ア 小学校低学年（一～三年生）——一～三枚以内（四〇〇字以上二二〇〇字以内）
- イ 小学校高学年（四～六年生）——二～四枚以内（八〇〇字以上一六〇〇字以内）
- ウ 中学校・高等学校——四～五枚以内（一六〇〇字以上二〇〇〇字以内）

※題名は一行目、学校学年氏名は二行目、本文は三行目から一マス空けて書いてください。

(二) 応募作品は、原則として自筆に限ります。ただし、障害等の場合はその限りではありません。その旨を明記してください。

(三) 応募作品には、所定の応募票を添付してください。

七、応募規定

(一) 小学校及び中学校の応募数は各部門二編以内、高等学校は三編以内とします。

(参考)

- 小学校低学年 一校につき 二編以内（一～三年生）
- 小学校高学年 一校につき 二編以内（四～六年生）
- 中学校 一校につき 二編以内
- 高等学校 一校につき 三編以内

(二) 応募作品は、未発表のものに限ります。

(三) 応募作品は、理由のいかんにかかわらず返却しません。

(四) 応募作品の著作権は当会に帰属します。

八、応募方法

下記の応募票を添付し、学校のある市町村の社会福祉協議会に令和六年九月十三日（金）までに応募してください。

九、選考

選考委員会を設けて、部門ごとに入選作品を合計二十五編程度選考し、令和七年二月（予定）に発表します。

十、表彰等

入選者には賞状、副賞及び優秀作品集を贈呈します。

十一、作品集の作成等

入選作品を掲載した優秀作品集を作成するとともに、入選作品は愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターのホームページに掲載します。



令和6年度
第42回 福祉体験作文コンクール

優秀作品集

発行 社会福祉法人
愛知県社会福祉協議会

〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目50番地
愛知県社会福祉会館内

TEL(052)212-5502 FAX(052)212-5503

